

ました。

やがて、彌兵衛の甥そとの城右衛門、九十郎のあつせんで、静かな最後の酒宴がはじまりました。酒はすきな者が三獻、飲めない者はいいかげんにして、いづれも愉快さかづきに盃をかたむけました。

彌兵衛の妻は、大事な門出を祝つて、鴨かひと菜なとの吸物に、「名取り」といふ意味をきかせて、めいめいをもてなしました。

『菜と鳥……。ははあ、名を取るのですか。お志をいただきませう。』さういつて内藏助は、大そうよろこんで、さらに一つ盃を飲みほし、めいめいにまはしました。

みな緊張きんちやうして、「今夜こそは」といふ心持が、あふれておりましたが、しかし一人として、肩ひぢをはつたりして、悪くかたくなつてゐる者はありませんでした。しづかに飲んで話したり笑つたりして、討入りのよろこびを感じあつておりました。

彌兵衛金丸は、もう七十六歳といふ大老人でした。ころよく酒を飲み、ころよく酔つて、そして喰べる物も充分にたべてしまふと、

『去年三月十四日以来、はじめて酒に酔ひました。まだ、定めの時刻まで間がごさいます。老人は御免をこほむつて、一寝入りいたしますよ。』さういつて、彌兵衛は一間に入つて、いびきを立ててぐつすり寝こみました。

この門出の酒宴は、本所林町の堀部安兵衛の宅と、相生町の前原爲助の宅とではじまつておりました。つまり討入りの四十七士は、宵のうち三ヶ所に集まつて、打ちくつろいで、酒を飲んだりして、いろいろな



勢ぞろひの刻限の來るのを待つてゐたのでした。そのうちには、吉田忠左衛門や原惣右衛門のやうに、兩國橋向かふの龜田屋といふ茶屋に入つて、蕎麥切などで一ばいかたむけてゐる者もありました。

勢ぞろひは九つ半すぎ(一時)に、安兵衛の宅ですることになつてゐました。回向院前でやつたとか、饅頭屋久兵衛方でやつたとか、あるひは兩國橋のたもとでやつたとかいふのは、いづれもまちがひです。

内藏助らは、めいめい討入り装束の包をさげて、九つすぎに、彌兵衛の宅をえました。降りつもつた雪は、もう凍つて、陰曆十四日の月は、しろじろとさえてゐました。

大川ばたに出ると、川風が切尖のやうに、するどく、骨身にしみました。彌兵衛は、まだぐうぐう眠つてをりました。

内藏助は安兵衛の宅へ行つてひと休みすると、それからそろそろ討入りの身仕度をしました。その時主税は、すみの方でむじやきに眠つてゐました。

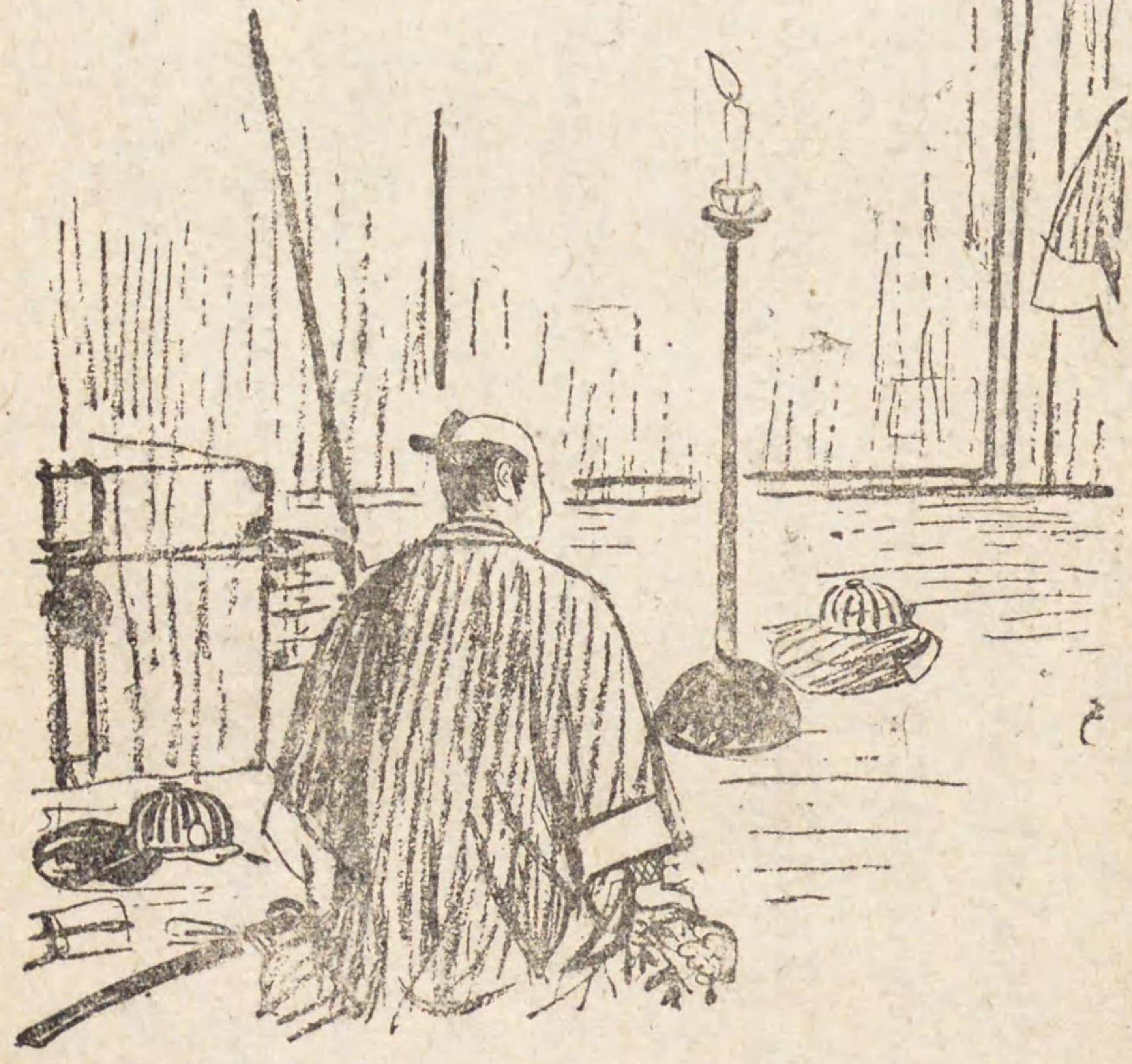
「ああ、主税殿が……。大事にのぞんで動ぜぬ氣性。たのもしいこととてございます。」

といつて、惣右衛門はしきりに、その度胸に感心してゐました。

討入りの身仕度は、四十七士いづれも鎖帷子を着て、紅梅裏、黒羽二重の小袖——なかには、大高源吾のやうに、紅兩面の下着に、黒兩面、廣袖の小袖といふやうな、古風にこつた好みもあれば、岡島八十右衛門のやうに、紅と白との染分。矢頭右衛門七のやうに、白と紫との染分。堀部彌兵衛のやうに、白繻子の童子格子。間新六のやうに、紫鹿子とい



袖は一様に  
 黒羽二重で  
 した。さうし  
 て羽織は、黒羅  
 紗。それに緋綿襷  
 萌黄金襷、または  
 緋緞子、みどり錦、  
 白紗綾などの美々し  
 い裏をつけて、襟と  
 袖とに、白びろうど、  
 白覆輪、または、白皮



ふやうな下  
 着もあり  
 ましたが、  
 多くは淺  
 黄、鼠、  
 また  
 は  
 堅縞  
 亂格  
 子の下  
 着に、小





の縁をとりました。

それに、いづれも浮紋織物の裁つけをはいて、主税をはじめ多くは紅白縮緬のしごきをしめました。寺坂吉右衛門さへ、紅梅裏の黒羽二重の小袖に香をたきこんでゐたくらゐですから、いづれも一世の晴れの身仕度でした。ただ一人、富森助右衛門だけは、黒小袖の下に、白無垢の小袖をかさねましたが、これは母の小袖を、母にいはれたとほりに討入りに着てゐたのでした。

それからめいめい、鏡の前立うつた兜頭巾。また銀の短冊に、めいめの姓名を書きつけて、袖印にしました。そしてめいめい合圖に吹く呼子笛を糸につけて襟に下げ、白布に鎖のはいつた襷。いづれも百文の金と、二兩の金(一分だともいひます)を用意して「我が死骸を取納め候人に

酒代に差上げる」と書いて、ふところに入れてゐました。そのほかに、まだめいめい氣つけ薬と血止薬と、餅と焼飯とを用意して持つてゐました。

内藏助もそのとほりでした。やはり、紅梅裏、黒羽二重の小袖に、浮紋織物の裁つけ。黒の滑皮でつつんで、さらに、それに白の滑皮で縁をとつた兜頭巾に、黒羅紗の羽織、それにも、白覆輪で目じるしの縁がつてありました。そして、白の采配と銅羅とを持つて、姓名を書きつけた袖印の短冊——それが、内藏助だけは金でした。腰の大小は、黒塗りの金拵へ——これが、相州物の大亂焼であつたともいへば、長光だつたともいひます。さうして、その小柄の柄に「萬山不重 君恩重。一髮不輕、我命輕」と、この十四字が彫りつけてありました。



内藏助の魂は、この十四字のうちにくめられてゐたのでありませう。一般には、この討入りが、例の山鹿流の陣太鼓で、大そう景氣がつけられてゐます。山鹿流の陣太鼓を鳴らさないでは、討入りが出来なかつたくらゐに思はれてゐます。けれども、たしかな記録によりますと、山鹿流の陣太鼓は、まつたく、のちの世の、作りごととしなければなりません。

義士たちが、討入りをする前に、内藏助に血判をしてちかつた「覚えがき」がありますが、その一ヶ條に、「銅羅どらの合圖は、總人數 引取り候時、打ち申すべきこと」と、はつきり書いてありますから、内藏助が討入りの時、銅羅を使つたことはたしかです。

次に、討入りの時に、義士たちが「山と河」の合言葉を使つたといふことですが、(一説には、「山と谷」といふ合言葉だつたともいひます)これもあやしいものです。内藏助はすぐに敵に、知られてしまふやうな合言葉なぞを使はないために、討入りの支度を、一様に火事装束きさくにしたのではありませんか。

さて、討入りには、あらかじめかたく定められた、進退、駈引かひひき、心得——すべて組織的の陣法がありました。また、軍令といふやうなものもありました。それを今の言葉で、かんたんについてみますと、

一、めいめいの働きには、功てからの大きい小さいはない。上野介の首をとつた者も、ただ警固だけに立つた者も、功は同じである。つまり四十七人は、一つの身體である。だから、おたがひにどういふことをするのはいやだとか、その方へ向かふのは損だとかいつてはならぬ。



一、上野介を討ちとつても、おたがひにちりぢりばらばらになつてはならぬ。傷を負つたものはたがひに助けあふ。もし、とても助からぬ大傷を受けたものがあれば、首をあげて引取ることにする。

一、討入り日が定まつたら、夕刻までに、物しづかに、かねて定めた三ヶ所に集まる。

一、二十四人は、表門から進む。

一、二十三人は、裏門から進む。

一、三人を一組とする。組三人は、形と影との如くなつて働く。けつして離れてはならぬ。

一、たとへ侍であつても、手向かひをせぬものは討ちとつてはならぬ。いはんや、女子供にはかまはぬこと。

一、勝負のうち、ことに火の元に氣をつける。

一、上野介の首をとつて持参するとき、上野介の上着うわぎをはいで首をつつむ。

一、上野介の首は、亡君（内匠頭）の墓へ持参する。もし途中で、檢分の役人に出あふた時は、その次第をのべ、それにてゆるされなければ、役人の指圖次第になる。

一、上野介の子息（左兵衛亮）の首は、とつても持参するには及ばぬ。

一、上野介の首をとつたら、合圖の笛を吹いて一同に知らせる。

一、銅羅どうらの合圖で、總人數引きあげる。

一、引上場所は回向院まがういんとする。もし、回向院に入れなければ、兩國橋にこくはし橋際きわ廣場にする。



一、吉良の邸にて、勝負のうちは、表門、裏門、どちらも閉めておく。檢分の役人が來ても門はあけぬ。一人、潜くぐりから出て、上野介の首をとり次第に、人數のこらず呼び集め、お指圖を受くる旨むねを申しのべて、猶豫いっよをねがふ。そして、公儀の役人にたいして、けつして無禮輕卒のふるまひがあつてはならぬ。

一、引上は、裏門よりする。

このほかにも、まだ少しありますが、要領はざつとかうです。そしてこの原文は、大たい、吉田忠左衛門がつくつて、それに内藏助と小野寺十内の考へが加へられたものでした。また、原惣右衛門や富森助右衛門片岡源五右衛門などの考へも加はつてゐたかも知れません。なぜなら、内藏助を四十七士の頭領とらひやうとすれば、忠左衛門はちやうど副頭領ともいふ

べき格の人でした。そして十内が、參謀さんぼう總長、惣右衛門が次長。助右衛門と源五右衛門とは、參謀といふやうなぐあひになつてゐましたから。

四十七士の討入りは、かうして一糸みだれぬ順序と用意とがありました。さうして上野介を討ちとつたら、ひとまづ、回向院えかういんまたは兩國橋に引上げて、それからさらに、芝、高輪の泉岳寺に引上げることになつてゐました。しかも、上野介の首さへとつてしまつたら、一人のこらず切腹することにきめてゐました。よく「決死の覺悟でやる」といふことをいひますが、四十七士のは、決死のかくご以上です。目的を達したら、切腹するといふのであるから——つまり、みな「一髮不輕我命輕」のはつかるからずわがめいかるしか

くごでした。



刻一刻と、時はたつて行きました。雪に沈められてしんとした街に、  
八つ時（二時）の鐘がひびいてわたります。

『もう刻限だぞ。』

と、だれがいふとなく、そんなささやきが聞えて、安兵衛の宅は、何  
とはなしに、ざわざわして來ました。

主税は、ひと寝入りすると、むくむくと起上つて、もうすつかり討入  
りの身支度をしてゐました。兜頭巾かぶとづきんに黒羅紗くろろしやの羽織、それが、紅白縮緬あざやま  
の襷たすきとしごきとにいろどられて、ことに美々しく、ことにりりしく見え  
ました。

主税は、裏門の方へむかふ西組二十三人の大將でした。父と同じやう  
に采配さいはいを持つて、片手に十文字の槍をかいこんでゐました。そして忠左  
衛門と十内とが、いづれも鍵槍かぎやりを持つて、主税の介添役かいてんやくになつてゐまし  
た。

奥田貞右衛門と近松勘六とは、偵察ていさつの役を引受けて、一足先きへ出か  
けました。貞右衛門は孫太夫の子でした。この父子は、どちらもちやう  
ど、薙刀なみだのやうな大太刀を持つてゐました。そのすごい大太刀を持った  
ものが、この父子のほかにもまだ二人ありました。堀部安兵衛と大高源吾  
——二人ともに、腕うでききの剛勇でした。

早水藤左衛門はやみづとうざゑもんは、弓の上手。それで一人だけ弓を持ちました。また、  
神崎與五郎と、千馬三郎兵衛ちまはさぶらうべゑ、茅野和助かやのわすけ、間新六まにんろくの四人は、半弓を持ち  
ました。

次に、十文字の槍を持ったものが、内藏助、主税、惣右衛門、源五右



衛門、大石瀨左衛門、間喜兵衛、その子十次郎、  
間瀬孫九郎、岡野金右衛門、中村勘助——以  
上、十一人ありました。それから、鍵槍  
を持つたものが八人、それは、忠左衛門



に十内、不破數右衛門、木  
村岡右衛門、間瀬久太夫  
村松喜兵衛、潮田又之  
亟、矢頭右衛門七など  
でした。  
そのほか、貝賀彌左  
衛門は手槍。武林唯七



は大身の槍。勝田新左  
衛門は槍。堀部彌兵衛と  
磯貝十郎右衛門、村松三太夫  
の三人は、直槍すくやうを持ちました。合はせる  
と、槍を持つたものが、二十五人ありま  
した。

やがて彌兵衛金丸も、直槍の石突いしづきのと  
ころを七八寸ほど切つて、落したのを引  
つさげてやつて來ました。それで四十七  
士が、のこらずそろひました。

彌兵衛と一しよに、甥せむせの城右衛門と九十郎





と、それに内藏助に縁を引いた大石三平とが、加勢に來ました。しかし内藏助は、同盟に加はつてゐる人でないからといつて、三人の加勢をこ  
とわりました。そして、古式どほりに出陣の采配をふりました。

それで討入りの第一歩がふみ出されました。四十七士は、今、一丈ほ  
どの竹のさきに、敵討ちの趣意をかけた「浅野内匠頭家來口上書」とい  
ふ一通をむすびつけて、それを眞つ先に押立てて、しづしづとくり出し  
ました。そのなかに、六十八歳の間喜兵衛と、彌兵衛金丸との大老人が  
腰もしやつきりと、かいがひしくあるいて行くのが、だれの目にもつき  
ました。

わかいものうちには、二挺の梯子をかついで行くものもありました。  
また、二挺の斧と、二本の掛矢と、それから「てこ」とを、かついで行

くものもありました。

有明けに近い月は、いよいよさえて見えました。寒さはしんしんとし  
て、張りきつた肌に喰ひ入り、めいめいの息が、白く夜氣を分けました。  
そして、兜頭巾の前立の鏡や、槍の穂先に、殺氣がきらめきました。静  
かな足音が、すごみをもつて、げんしゆくに進みました。

上野介の邸は、安兵衛の宅からおよそ七八町ほどしかはなれてゐませ  
んでした。ほどなく、上野介の屋敷の屋根が見えました。

内藏助は、そこで四十七人を二手に分けました。西組と東組は自分が  
大將でした。この方は二十三人。兜頭巾の前立の鏡のなかには「いろは」  
文字の「い」から「ち」までを、左がきにした符がしてありました。つ  
まり、「ろ」の字の者が三人、「は」の字の者が三人として、それが一組に



なつてゐたのでした。

西組は、「り」から「た」まで、これは右文字にかいてありました。

内藏助の方では、内藏助と惣右衛門と彌兵衛と久太夫と、それに村松喜兵衛とが、表門の内をかためるのでした。

近松勘六、大高源吾、間十次郎、早水藤左衛門、矢頭右衛門七、神崎與五郎——この二人組六人が、玄關をかためることになつてゐました。

岡野金右衛門、貝賀彌左衛門、横川勘平。この一組は、新門をかためることになつてゐました。そして片岡源五右衛門、富森助右衛門、武林唯七、勝田新左衛門、矢田五郎左衛門、奥田孫太夫、吉田澤右衛門、小野寺幸右衛門、岡島八十右衛門、この三組九人が、主戦隊になつて、奥へ斬りこんで行くことになつてゐました。

主税の方では、主税と忠左衛門と十内と、それに間喜兵衛と潮田又之丞とが、裏門の内をかためるのでした。

木村岡右衛門、不破數右衛門、前原爲助、茅野和助、千馬三郎兵衛、間新六、間瀬孫九郎、中村勘助、奥田貞右衛門、この三組九人が、裏門わきの長屋をかためて、そこから切つて出ようとする吉良家のものを、ふせぐことになつてゐました。

さうして、磯貝十郎左衛門、堀部安兵衛、倉橋傳助、赤埴源藏、大石瀬左衛門、村松三太夫、菅谷半之丞、杉野十平次、三村次郎左衛門この三組九人に、寺坂吉右衛門を加へて、十人が隠居所の臺所口から奥の方へ斬りこんで行くことになつてゐました。

討入りの手配りは、以上のとおりでした。そして、父子兄弟は、わか



れて、父が東組になれば、子は西組になるやうにしてありました。たとへば、吉田忠左衛門、澤右衛門の父子。堀部彌兵衛、安兵衛の父子。間瀬久太夫、孫九郎の父子、村松喜兵衛、三太夫の父子。奥田孫太夫、貞右衛門の父子。小野寺十内、幸右衛門の父子——この幸右衛門は、大高源吾の弟で、十内の養子でした。それで源吾は、十内と一しよに西組に幸右衛門は東組になりました。さうしてみな、父が表門に向かへば、子が裏門に向かふやうにしてありました。ただし、そのうちには間喜兵衛のやうに、父子三人といふのがありました。これは、兄の十次郎は東組になり、弟の新六は父とともに西組になりました。また、貝賀彌左衛門は、吉田忠左衛門の弟でしたが、これも表と裏とにわかれて働きました。かうして一組三人は、同體になつてたすけ合ふが、組以外は父子兄弟で

も、他をかへりみないといふかたい申合せがしてありました。

吉良の邸の表門の長屋の屋根に、二挺ちんぎょうの梯子はしごがかけられました。大高源吾が眞つ先きに、つづいて間十次郎、吉田澤右衛門、岡島八十右衛門が、梯子を登つて屋根へ上ると、ひらりひらりと身ををどらせて向かふへ飛びおる。片岡源五右衛門、富森助右衛門、武林唯七などが、それにつづきました。

何といつても堀部彌兵衛は、大老人でした。梯子は登つても、屋根から向かふへ飛びおることが出来ませんでした。まごまごしてゐると、先へ飛びおりました横川勘平が「さ、おいでなさい」と、両手をひろげて彌兵衛をだきおろしました。

神崎與五郎は少しはやつて、雪にすべりました。そして右の腕を、傷



つけました。原惣右衛門も、飛びおりる時に足をくぢきました。しかし二人ともに、勇氣りんりん、雪を蹴立てて、玄關に駈け向かふ。

『われわれどもは、もとの浅野内匠頭の家來、亡君の仇をむくいるために推参すゑまゐいたした。尋常に出あつて勝負あれ。ねがふところは、ただ上野介殿のお首しるしである。』

と、惣右衛門は内藏助に代つて、大音によはりました。

その言葉ををはるかをはらぬに、間はざま十次郎、大高源吾、近松勘六、小野寺幸右衛門、吉田澤右衛門、岡島八十右衛門などは、もう玄關にとりかかつて、舞羅戸まひらどをおし破らうとしました。

玄關先には、「浅野内匠頭家來口上書」を、むすびつけた竹が立てかけられました。

源五右衛門は、門の番小屋をのぞいて見ると、足輕の番人が一人、居ねむりをしてゐました。づつと入つて飛びかかりざま、手早く繩をかけようとすると、物音におどろいて、そばに寝てゐた二人の番人も飛び起きました。

『や、狼藉ろうぜきもの……お出合ください。狼藉もの、狼藉もの……』

と、ねぼけ聲にわめきながら、一人はだつと表へ飛び出しました。とそこへやつて來た武林唯七が、大身の槍をしごいて、ただ一突きに、そいつを突き伏せようと思いました。足輕は、わめきわめき逃げる。唯七は追ひかけて、厩うまやの前で突き伏せてしまひました。

こつちは源五右衛門。

『われわれは、上野介殿のお首をちやうだいにまゐつたのだ。御門の鍵かぎ



を出せ。』

と、一人の足輕をとりおさへますと、一人がすきを見て、棒をふるつて勢ひするどく打つてかかつて來ました。

『おのれ……。』

と、源五右衛門は棒をはらつて、十文字の槍をとりました。

そこへ彌兵衛金丸が、づつと入つて來て、一人の足輕をとつておさへて繩なはをかけました。棒をふるつた男は、棒を引いて、逃げてしまひました。

繩をかけられた足輕は、がたがたふるへながら、いはれるままに、やつと、門の鍵かぎの入つてゐる箱のあるところを教へました。彌兵衛は鍵を受けとりました。源五右衛門は、臆病おくびやうな足輕を柱にしばりつけました。

西組の主税の方は、はじめから、裏門の扉をたたき破つて、亂入するかくごでした。で、三村次郎左衛門が、掛矢かひやをふるつて、「えいや、えいや」と、門の扉をたたき破らうとしますと、杉野十平次も、同じく掛矢を、門の扉へ打ちつけました。

ヤがて門の扉は、めりめりと破れてたほれました。

村松三太夫は、扉をふみ越えてをどりこみ、

『村松三太夫、一番槍。』

と、名のりをあげました。

磯貝十郎左衛門、堀部安兵衛、倉橋傳助、赤埴源藏、大石瀨左衛門、

菅谷半之丞の面々が、つづいてばらばらと押しこんで、まつしぐらに臺

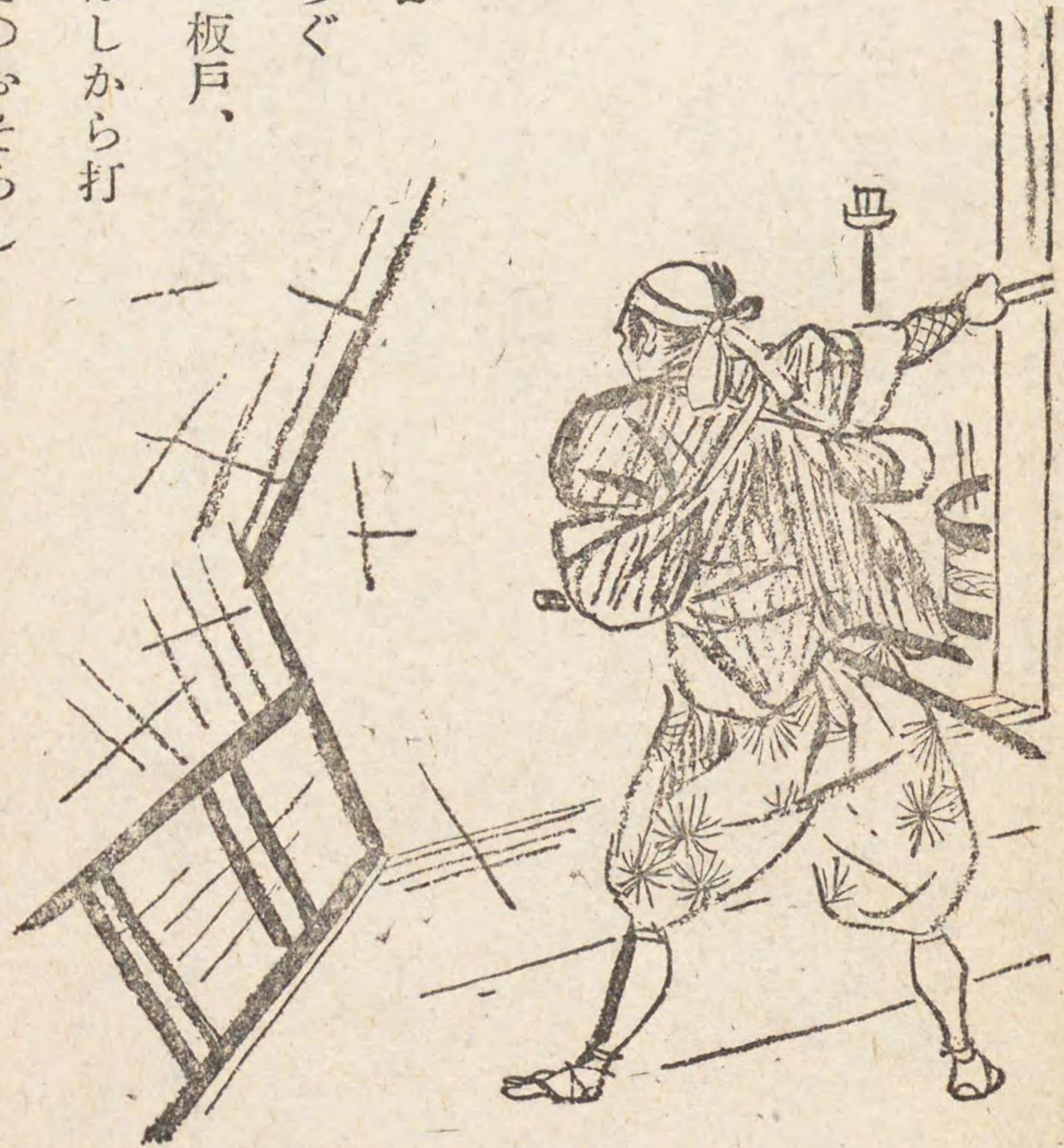
所口の方へかけむかひました。さうして茅野和助、千葉三郎兵衛、間新まにん



六など、半弓を持つた者は、  
 門わきの長屋へ、さん  
 ざんに矢を射出  
 して、長屋の敵  
 が出て来られ  
 ないやうに  
 しました。  
 その時、  
 吉良家の取  
 次役、清火  
 團右衛門が、



うつかり長  
 屋から出て  
 来て、すぐに  
 斬られてしま  
 ひました。  
 次郎左衛門と十  
 平次とは、掛矢をふ  
 るつて、臺所口からぐ  
 んぐん奥へ進んで、板戸、  
 襖、障子を、片つばしから打  
 ちこはしました。そのおそろし





い破壊の物音が、曉方のしづけさを破つて、すさまじく屋敷ぢゆうにひびきわたりました。

やがて女子供の泣きさけぶ聲が、あつちにもこつちにも聞えて、吉良の邸は血なまぐさい修羅道しゅうらだうとなりました。

## 九 亂らん 鬪とう

上野介の方には、上杉家から大ぜい附人つきびとが来てゐました。その附人に、腕ききの勇士がゐました。それがよく戦ひました。けれども四十七士の方は、忠義の一念が火のやうに燃えて、しかも進退かひひき駈引理かひひきになつて、夜討の極意がつくしてありました。それで上野介の方の勇士は、五人六人とだんだんに、討たれてしまひまし

た。しかし上野介のゐるところは、容易にわかりませんでした。

上野介の邸は、東西三十間、南北に二十間、ずるぶんひろい屋敷でした。表門が東にあつて裏門が西の方にありました。往來を越すと向かふが今の回向院まがうゐん、南の方はづつと、高塀たかべいになつてゐました。北の方は土屋主税と本多孫太郎との屋敷の地つづき——その土屋の屋敷には、その晩寶井其角たからまきかくが来て、泊つてゐたといふ説もあります。

表門を突きあたると、そこが玄關。それから侍部屋、書院、納戸ねんどとつづいて、その納戸が、左兵衛亮さへいりやうの居間になつてゐました。そして中庭をへだてて、上野介の隠居所があり、そこへ長廊下がつづいてゐました。

その隠居所は、裏門から近かつたので、西組に加はつた面々は、「上野介の首をあげよう」といふ意氣ごみが、東組より一そうさかんでした。



表玄關の次の間に、齋藤十郎兵衛、天野貞之進ら三人の者が、「寢番」として詰めてみました。

八十右衛門、幸右衛門が、玄關の戸を打ちやぶる音を聞くと、三人はがばとはね起きました。

『赤穂浪人といふからには、大ぜいでせう。ふせげるだけふせがうてはありませんか。』

さういつて、いづれも手ばやく身ごしらへをして、玄關へをどり出ました。

八十右衛門、幸右衛門、澤右衛門、勘六、五郎左衛門らは刀、源吾と孫太夫とは、一尺七寸の櫛かむの木の柄え、南蠻鐵なんばんてつの鐔つば、二尺八寸無そりの大太刀、十次郎は十文字の槍。いづれもきつさきをそろへて、名のりかけ

名のりかけ、十郎兵衛ら三人に斬つてかかる。火のやうな殺氣がそこらみなぎつて、幸右衛門らは勢にまかせて、ぢりりつ、ぢりりつとつめよつて行く。

やがて吉良方の三人は、死物ぐるひになりました。切りむすぶ又音が時々物すごくひびきました。

幸右衛門は、頭をはかつて飛鳥のごとく、ばつと飛びこんで、一人の高股たかまたを切りました。その男は、たじたじとなつて、どつとたほれました。とたんに一人は、刀を引いて奥へ逃げこみました。それで玄關先きのかためはくづれて、幸右衛門、十次郎が眞つ先きに、七八人がばらばらと奥へ亂入しました。

しかし、まだ一人のこつてみました。この男は、矢田五郎左衛門が引



受けて、するどい太刀さきこみこみふみこみ斬りたてました。もう息はあえぎ、太刀すぢはみだれて、その男は後へ後へと身を引きました。二の腕、小手先、頬ほのあたりに、三四ヶ所の薄痕うすでも負ひました。片袖を切られて、それがうるさくひらひらしました。それでもその男は、ねばり強くふみとどまつてゐました。

『よう。』

五郎左衛門は少しめんだうくさくなつて、今度こそはまつ二つといふ氣合で斬りこみました。

その男は、一足さがつて、あぶなく受けとめました。とたんに鬚すげの元結むすびがはじけて、亂髪みだれがみになりました。肩さきが波を打ちます。

『不思議なやつだ。どつかにこいつの業わざがある。』

と、五郎左衛門は、思ひました。さうしてゆだんなく、斬りこんで行きました。

だんだん斬りたてられて、その男は、「寢番」の部屋まで、さがつて來ました。

そこに銅の大火鉢がおいてありました。五郎左衛門は、だいぶじれ氣味になつて、今度こそはと、手強く斬りこみました。敵は、またふらふらと後へ引いて、立ちなほらうとした時、運のつきか、火鉢に足をとられて、仰向けにたほれました。五郎左衛門はすかさずをどりかかつて、まつ二つと斬りこみ、肩先をしたたかにやつつけましたが、刀尖を火鉢に斬りこんで、三四寸ほどぼつきり折れました。

五郎左衛門は自分の刀をすて、敵の刀をとりました。そして、さつさ



と奥の方へ進んで行きました。それより前に幸右衛門は、「使者の間」に入つて、その床の間に立てならべてある弓の弦を、七八張ほど片はしから切りはらつておきました。

裏門の方は、上野介の居間が近いだけに、吉良方でも必死にふせぎました。清水一學、大須賀治郎右衛門。これは臺所に、左右田源八郎、新貝彌七郎、齋藤清左衛門、宮石所右衛門、伊藤喜右衛門、杉山與五右衛門、石川喜右衛門、鈴木元右衛門、小堺源二郎、牧野春齋。これは長屋の前に、うんとぐわんばつて目ざましく働いてゐました。

そのうちにも、牧野春齋と清水一學——一學はまだ二十二歳のわかものでしたが、非常な勇氣ときびきびした太刀打とに、火の出るやうに戦つて、討入りの人々をなやました。また牧野春齋は、後に吉田忠左衛門が、「勇氣さかんなること、當夜第一」とほめたほどに、手強く戦ひました。身分はお坊主のやうなものでしたが、膽力がすわつて、腕前がすぐれてゐました。

『手向かふ者は斬つてしまへ。手出しをせぬ者は助けおけ。』

討入りの人々は、口々に、いくたびかさういつて叫びました。

上野介の方には、この夜、百二十三人からの人がゐたといひますが、そのうちで、武士らしく働いたのは、三十人にすぎませんでした。家老の左右田孫兵衛、齋藤宮内のごときは、まつ先きに長屋の壁をやぶつて邸の外へ逃げてしまひました。重立つた人でさへさうです。まして、はした侍や足輕などは、たいがい、すみつこの方に小さくなつたり、戸柵



のなかへもぐりこんだりして、ぶるぶるふるへてみました。それで勇敢に働いた者も、みなてんでんばらばらでしたから、進退掛引とか、おた  
バひに助け合ふとか、さういふ手くばりが少しもありませんでした。

ですから討入りの人々のやうに、三人が一組となり、更にその一組が二組六人となり、三組九人となつて、それぞれの方に向かふといふやうに、組織のある敵に向かつては、まつたく片なしてした。どんな勇士でも、二人の勇士を敵にしては、たいがいやられてしまひます。さういふ理屈で、上野介の方の勇士は、片はしからたほされてしまひました。

磯貝十郎左衛門は、まだ二十四歳の若ざかりでしたが、思慮があつてすばしこい人でした。堀部安兵衛、倉橋傳助と一組になつて、臺所口か

ら斬りこんで行きましたが、すばやく奥の方へ進んで、蠟燭をさがしまはりました。

臺所に近いところに、まかたのぼん 賄番の部屋がありました。そこに、はした侍が一人、まごまごしてゐました。十郎左衛門は、づつと入つて行くと、

『これ、蠟燭があるだらう、出さない。出さないと一突きだぞ。』と、槍をかまへておどしつけました。

はした侍はまつ青になつて、ぶるぶるしてゐましたが、  
『はい、差上げます。』

といつて、戸棚をあけて、百口蠟燭を持出しました。  
『ともしなさい。』

十郎左衛門はさういつて、自分でも蠟燭に火をつけました。大きな蠟

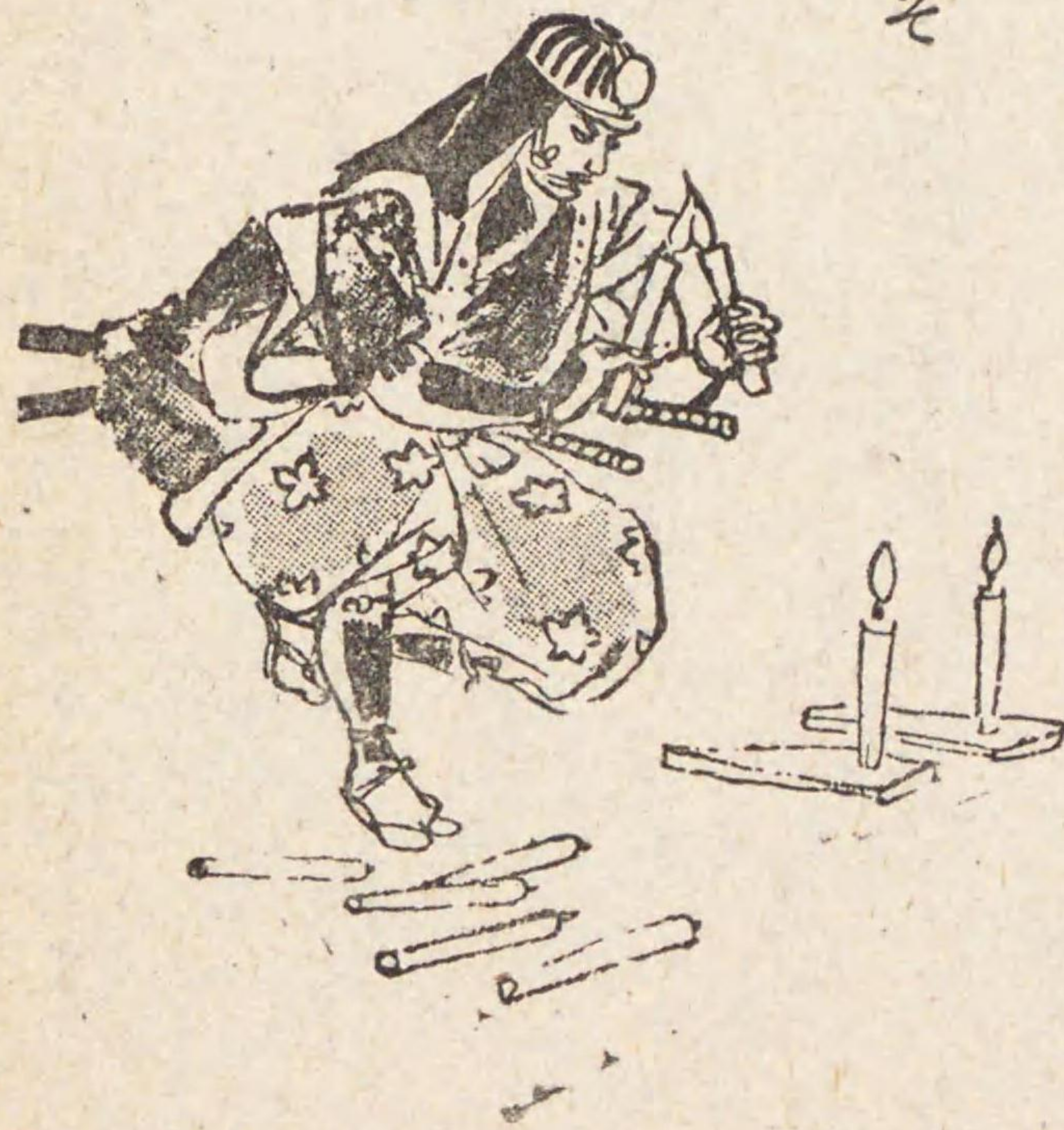


燭には、一本一本灯がともされて行きました。

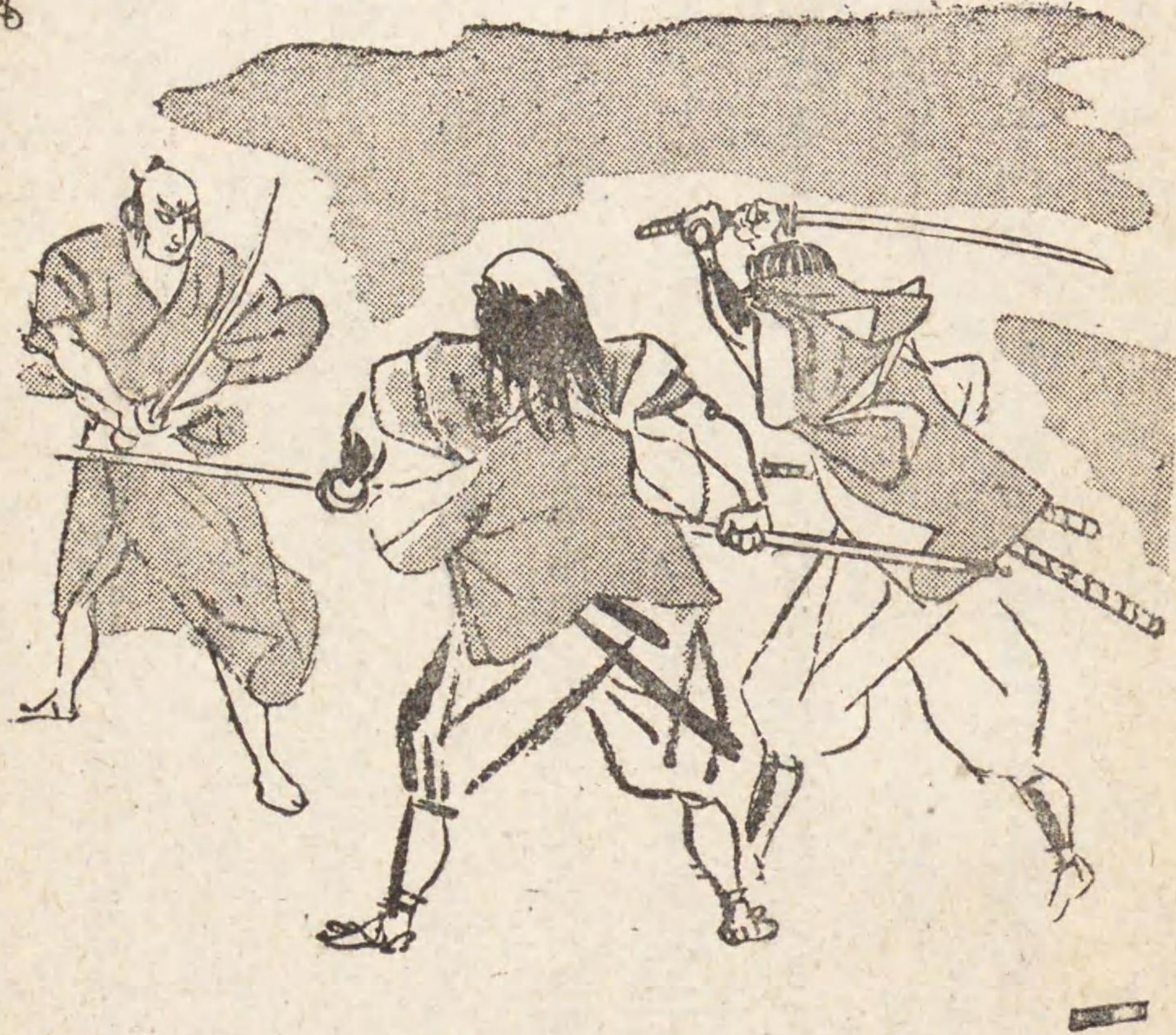
十郎左衛門は、あくまでも落ちついてゐました。すぐそばの臺所には安兵衛、傳助、源藏、瀬左衛門、三太夫などが、今や亂闘血戦のまつ最中だといふのに……。

十郎左衛門は蠟燭に火をともすと、それを臺所をはじめ、要所々々にくばつてあるきました。百日蠟燭の燈火が、屋敷のうちにあかるくかがやき出しました。

その燈火で、



討入り  
の人々  
の勇氣  
が百倍  
しまし  
た。  
『よい  
ところ  
へ氣がつ  
いた。今夜  
の一番槍にも





おとらぬ功ぢやぞ。』

と、内藏助も、その燈火を見て、十郎左衛門の機轉をたたへ、大いによろこびました。

彌兵衛の次の大老人、間喜兵衛は、裏門の見張りに立つてみました。その次の老人、吉田忠左衛門と小野寺十内とは、主税と一しよに、これも裏門のそばに立つて、逃げてくるものがあつたら、突き伏せようと待ちかまへてゐますと、となりの土屋の屋敷では赤穂浪士の討入りを火事と思つて、地境ちまきのところに、幾張となく高張提灯をかかげつらねて、非常をいましてゐました。

それを見て、十内はつかつかと、それへ進んで行きました。そして垣根ごしに、

『われわれは、故の淺野内匠頭の家來どもでございます。亡君の仇を報いようために、ただ今吉良家へ推参すゐさんいたしました。御隣家へは、そこつはいたしません。ことに火の元には、氣をつけます。』

と、ていねいに申しました。そして北から南の方へ、庭を見まはつて行きました。

その時一人、西の長屋を飛出して、屋敷へかけつけようとするものがありました。

『ようつ。』

それを見て、十内はびたりと、鍵槍かぎやりをつけました。

『なにつ。さあ来い。』

と、敵は勢ひするどく、斬つてかかりました。十内はばつとさがつて



槍をくり出しました。

「や」「よつ」と、三四合するうちに、十内は手練の早業。見事に敵の下腹のあたりを突きました。

「む……………」

敵はよろめきながら、どたりとたほれました。

ちやうどそこへ、東組の源五右衛門がやつて來ました。

「お見事に、やられました。」

源五右衛門は、さういつてほめました。

「いや、老人の冷水です。」と、十内はにこりとして、

「上野介殿は、どうですな。」

「さ…………。まだ、お居間もわからないやうで。」

「さうですか。とにかく、勝負は夜明けでせう。」

さういつて十内は、いくらか不安な様子でした。

そこへまた、原惣右衛門が、足をくじきながらも、跛をひきひきやつて來て、土屋主税の屋敷へ、十内と同じやうな挨拶をしました。

土屋の屋敷はひつそりとなりました。

そのころ、堀部安兵衛らは、臺所口で清水一學らをたほしてしまひました。また、瀬左衛門は、上野介の寢間まで飛びこんで行つて、藻ぬけの殻になつたその夜具蒲團に、まだぬくみの残つてゐることを知りました。

さうして、また、裏門がはの長屋の前では、木村岡右衛門、前原爲助

奥田貞右衛門、間瀬孫九郎、中村勘平、千馬三郎兵衛、間新六、茅野和



助、不破數右衛門らが奮戦して、吉良方の勇士、牧野春齋、齋藤清左衛門、左右田源八郎をはじめ、十人あまりもたほしてしまひました。その吉良方の勇士のうちに、榊原平右衛門といふ人がゐました。やはり上杉家から、附人になつて來てゐる勇士でした。こちらは据物斬りの名人とまていはれた不破數右衛門——その一騎打ちの勝負がはじまりました。

「ここはわたくしが引受けました。あなた方は奥へ……。かまひません。上野介殿の方へおいて下さい。」

さういつて數右衛門は、平



右衛門とわたりあひました。一同は屋敷の奥をめがけて、斬りこんで行きました。

さて、二人の一騎打——これはこの夜の大勝負でした。一上一下、たがひに斬りこむ、受けとめる。目にもとまらぬ早業は、正に五分五分の腕前でした。しかし平右衛門は素肌でした。數右衛門は鎖帷子を着こんでをり





ました。それで平右衛門の太刀さきに斬られ、また斬られて、羽織や小袖が、破れた芭蕉ばせうの葉のやうに、ばらばらになつても、身うちには痕きずを一つ受けませんでした。それと反対に平右衛門の方は、數右衛門の太刀先が、身體にふれるたびに痕を受けました。小手にも、腕にも、胸にも股ももにも、そして顔にも——平右衛門は、血みどろになりました。

それでも平右衛門はひるみませんでした。あくまでも一太刀ざつくりやつつけようと、手強こほく斬りこみました。さうして二人ともに、刀の刃が、鋸のこぎりのやうになつてしまひました。それほどに、兩方が鎬しのぎをけづりました。

けれども、平右衛門ほどの大剛も、淋漓れんりと流れる血とともに、氣力がだんだんおとろへました。太刀すぢもみだれて來ました。と見て、數右

衛門は勇氣百倍、ふみこみふみこみ斬りまくつて、やがて左の肩から右のわき腹かけて、袈裟けさがけに斬り下げた。平右衛門は土偶てこがくづれたふれるやうにたふれて、數右衛門は胸のあたりへ返り血をあびました。

左兵衛亮さひやうめいのゐる——納戸なとには、宮石新兵衛と山吉新兵八郎とが、左兵衛亮のそばについてゐました。そこへ武林唯七が、大身の槍をふるつて、飛びこんで行きました。その後から勝田新左衛門と奥田孫太夫と、敵の刀を持った矢田五郎左衛門とがやつて來ました。

『よつ。』——と、新兵衛と新兵八郎とは刀を抜きつれて、納戸の外へ飛びだし、四人をふせがうとしました。

唯七は、二人を新左衛門らにわたして、自分はだつと納戸へ飛びこみました。左兵衛亮は、いかにも若殿様らしい色白のよわさうな人でした。



それを見ると、まごまごしながらもやつと長押の薙刀をとつて立ちあひました。唯七はそれが左兵衛亮であらうとは、知りませんでした。

『生つ白いやつが、猪口才だ。』

さう思つて、ただ一突きにと、大身の槍を突きつけて行きました。

左兵衛亮も一生懸命でした。三四度槍と薙刀とを合せましたが、たちまち額のところを、突かれ、二の腕も突かれました。

そこへ、身の丈の特に高い須藤與一右衛門が、

『おのれ。』

と、わめきながら、そばから飛びだして来て、唯七に斬つてかかりました。

唯七は構へをなほしました。左兵衛亮はからりと薙刀を投げだして、

奥へ逃げだしました。

與一右衛門も、上杉家からえらんでよこした腕ききの一人でした。た、たつと、斬りこんで来る太刀すぢが、はげしくあざやかでした。唯七は、少ししたじじになりました。

ちやうどその時、うんと一聲。どしんと唐紙かなぞに、ぶつかつて人のたふれる音がしました。それは新左衛門らが、山吉新八郎をたふしてしまつたのでした。とたんに、

『お助太刀……。』

と呼ばりさま、大太刀をふりかざして、與一右衛門に斬つてかかつた

男——それは西組の堀部安兵衛でした。安兵衛の後には、組の磯貝十郎左衛門と、倉橋傳助とがひかへてみました。與一右衛門は、もうかなは



なくなりました。

まもなく與一右衛門は、安兵衛の大太刀にやられて、たふれてしまひました。

廊下の雨戸は、いつか引きはづされ、おしたほされてゐました。要所には百日蠟燭の火影があかあかと照つて、そこにも、ここにも、痰たんにうめく聲が、物すごく聞えてゐました。しかしどこにかくれてゐるのか、上野介の影も見えませんでした。

時がたつにしたがつて、人々の心には不安の影がうすぐらくさして來ました。小野寺十内なども、もう「勝負は夜明けまでぢや」なぞといつて落ちついてゐませんでした。

源五右衛門、助右衛門、源藏、瀬左衛門、孫太夫、新左衛門、安兵衛も、與一右衛門を斬つてしまふと、十郎左衛門、傳助と一しよになつて上野介をさがしまはりました。

中庭の燈籠とうろうのかげなどをさがすものもありました。天井へ槍を入れて見るものもありました。疊たたみをはがして縁えんの下も見ました。竈かまどのかげや、不淨場ふぢやうばにまで、槍を入れて見ました。けれども、やはり上野介の影も見えませんでした。

上杉家の附家老、小林平八郎は、その夜は非番で、東長屋にゐました。で、討入りと知ると、手早く仕度をして、二尺八寸の大刀を引つさげ、出ようとする、早水藤左衛門の射出す矢が飛んで來る。新門のそばには、岡野金右衛門、貝賀彌左衛門、横川勘平らが、勇氣りんりんとひか



へてゐる。これは、うつかり出るところではないと、しばらく様子をうかがつてゐました。

『ああ、どうかして、大殿（上野介）だけは、お助け申したい。なんともしてのがれねばならぬ。』

と、平八郎は氣をもみました。武士の意地、上杉家の面目にかけても上野介の身の上に、萬一の事があつてはならないと思ひました。

さうして、やがて女の小袖を、すつぽり頭からかぶつて、物かげから木かげへ、木かげから物かげへと、身をしのばせながら、上野介の居間のはうに向かつて行きました。しかし、月光と雪とに、その影の動くのが、はつきりと見えました。

『あやしいやつ。』

金右衛門は「それつ」と、その後を追ひました。

彌左衛門、勘平も、いつさんにその後につづきました。

平八郎は、「来るなら来い」といふやうに、白書院（座敷）前の庭にふみとどまつて、小袖をかなぐりすて、大刀を大上段にふりかぶりしました。

金右衛門は十文字の槍、彌左衛門は手槍、穂先をそろへてくり出す。

勘平はびたりと刀をつける。平八郎は三方に眼をくばつて、右へ左へ斬りこんで、たがひに雪を蹴立てて、きつ先から火が出るやうな、目ざましい勝負になりました。と、そこへまた、右衛門七と久太夫とがかけつけて、左方から鍵槍かぎやりで突いてかかる。平八郎は、苦もなくなふされてしまひさうに見えました。

そのころ、近松勘六は、奥から一人の敵を追つて出て、庭の泉水に落



ちて、ぬれ鼠のやうになりました。また、木村岡右衛門らの組では、すばしこく働いた鈴木松竹を討ちとり、八十右衛門、澤右衛門の組では、中庭で、老勇、鳥井利右衛門を討ちとりました。つづいて茅野和助が、長屋から討つて出ようとする松原多仲の肩さきへ、矢を射てたふしました。さうして小林平八郎も、金右衛門ら五人のために、突き伏せられてしまひました。

かうして吉良方では、討死したものが十六人。重傷に、息も絶えだえになつてゐるものが十一人。傷を受けたものが八人——血みどろになつてゐるものが、合はせて三十五人からあつて、もう手向かつて来る者もなくなつてしまひました。しかし上野介の姿は、やはり見つかりませんでした。

『これほどにさがしても、上野介殿の姿の見えぬのは、よくよく武運につきたのか。』

安兵衛などはさういつて、地團太ふんで業をにやしました。

むざんに荒された屋敷のうちには、しんとして、ただところどころに、だんまつま断末魔のうめき聲が聞えるだけでした。

人々のうちには、はりつめた心がゆるんで来て、上野介を討ちもらしたくやしさに、すすりあげて泣くものさへありました。

絶望。悲憤。もう、腹を切つてしまはうといひ出すものさへありました。そして、

『もうだめだ。』

といふ悲痛な聲が、人々の口からもれて來ました。



人々は白書院にあつまりました。内藏助もやつて来ました。忠左衛門、十内、惣右衛門らも、やつて来ました。この四人の人たちも、たがひに顔を見合はせたきりて、どうといふ言葉も出ませんでした。

しばらくして忠左衛門は、

『さきほど瀬左衛門殿がさぐられたところによりますと、上野介殿は、たしかに屋敷のうちに、かくれてゐると思ひます。まだまだ、失望することはありません。夜明けまでは、間があります。それまで、根かぎりさがすといたしませう。夜が明けて、もし上杉家から加勢が来ましたら一方にふせいで、一方にさがしませう。この上はもう運を天にまかせるより外ありません。』

と、人々の腹の底にこたへるやうにいひました。その聲は低かつたが

沈痛でした。

人々は、その言葉に感奮かんぷんして、さらにもう一度、八方に手わけしてさがしすることになりました。靜かに、ひそやかに一同はさがしてまはりました。大きな屋敷のうちには、まつたく、人つ子一人ゐないやうに思はれました。

間十次郎はさまが、何ごころなく臺所わきの、物置のやうな小部屋の前を通りかかりますと、そのなかで、ぼそぼそと人のささやきあつてゐるやうな聲がしました。

『はて……。』

と、足をとめて、息をこらして、じつと耳を立ててゐますと、またひそひそとささやき聲がもれて来る。



「人がゐるな。」

十次郎はさう思ひまし

た。板戸をけ

はなして、

ずつと

入らう

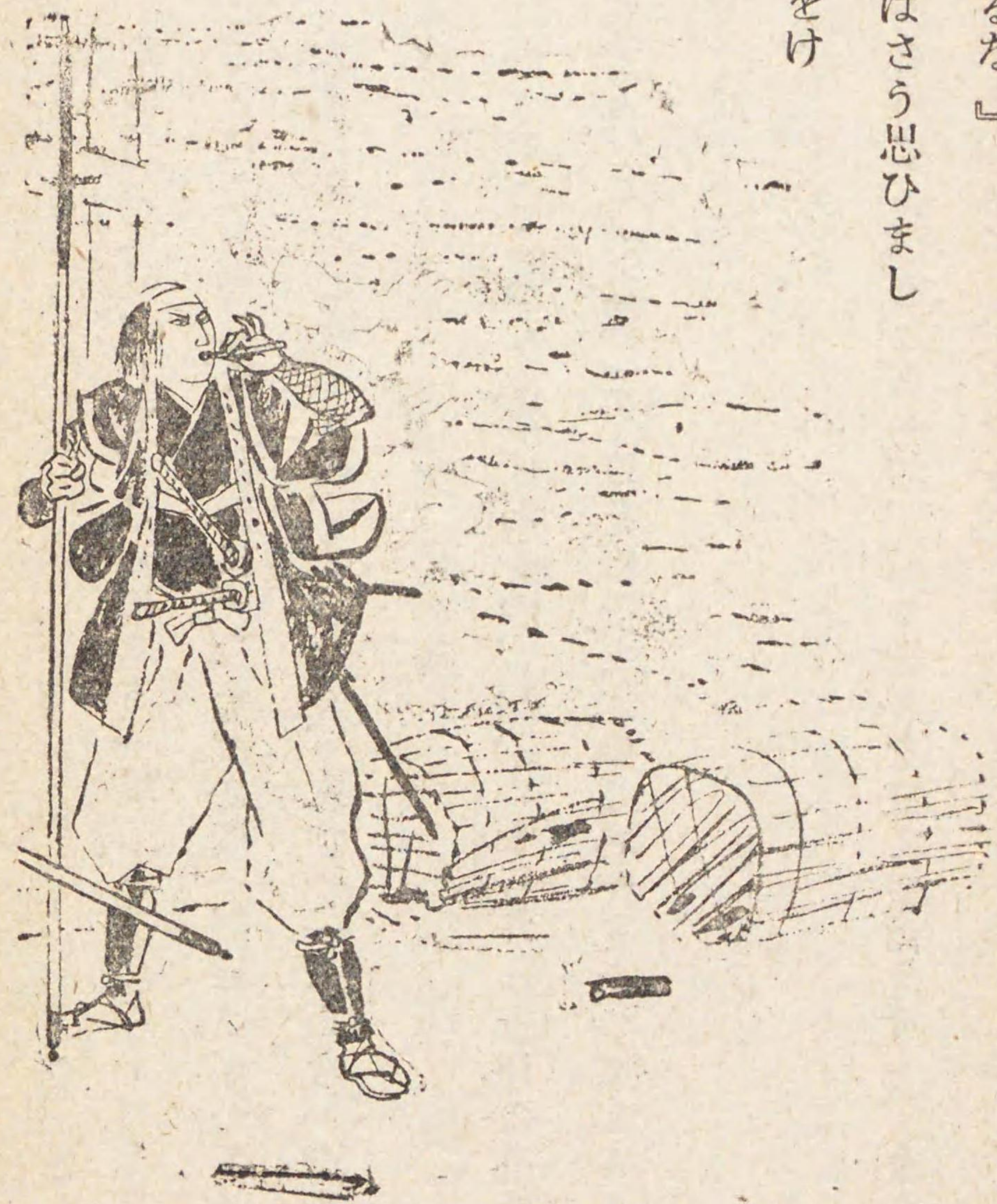
としま

すと、

ふいに

なかか

ら一人



の若侍

が飛び

だして

斬つて

かかり

ました。

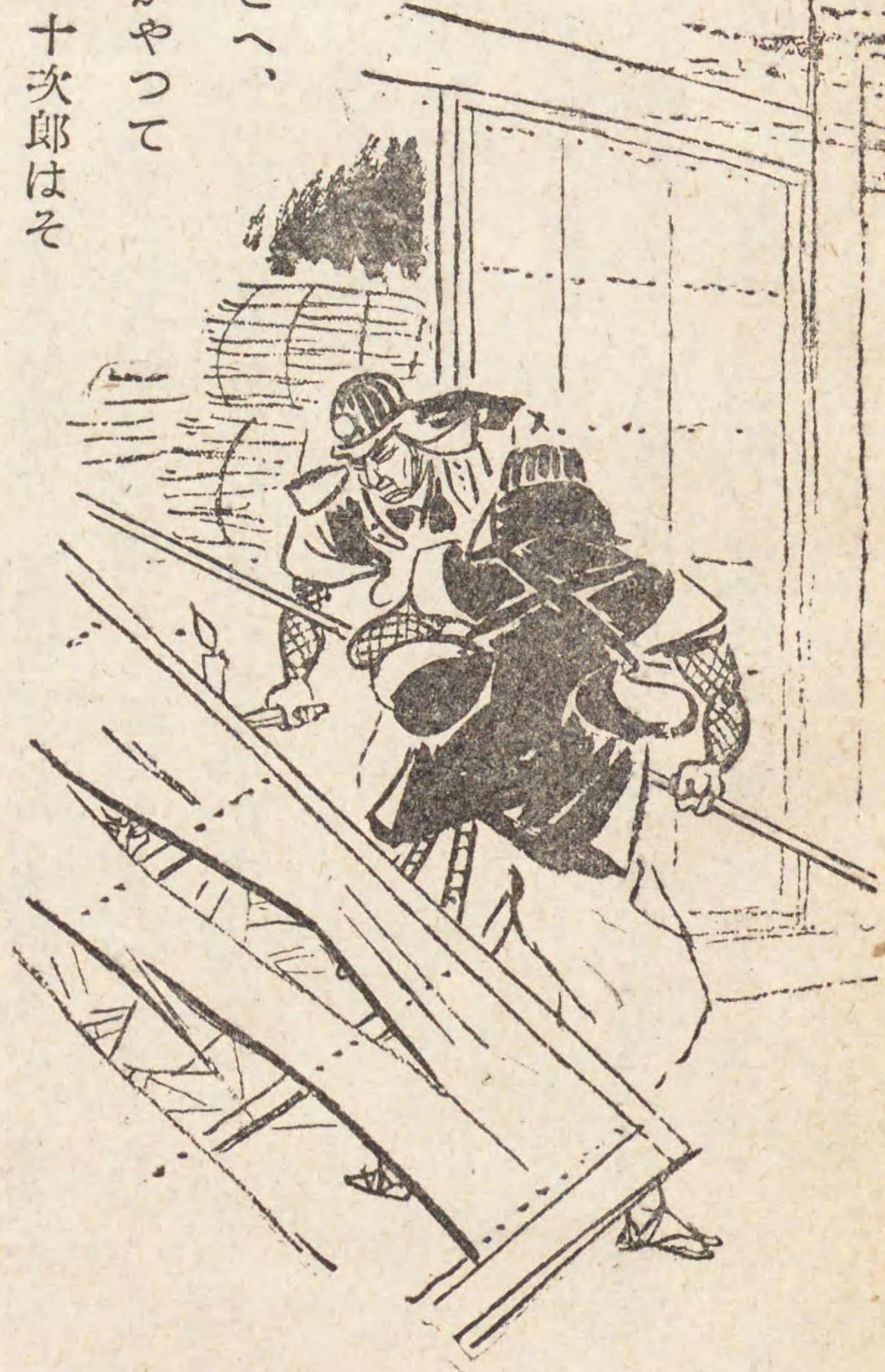
と、そこへ、

武林唯七がやつて

来たので、十次郎はそ

の若侍を唯七にわたしておいて、づつと小部屋へ入りました。とたんに

また一人、それこそ脱兎だつとのごとく飛びだして、十次郎を突きのけるやう





にすると、そのままだつと逃げだしたものがありません。中はまつくらでした。しかし、たしかにもう一人、残つてゐるやうでした。

『上野介殿はどこにゐる。お前などの命はとらん。案内をしろ、案内を。』と、十次郎はそばによつて、槍を突きつけておどしつけました。

けれども、その男は首をちぢめ、暗がりの中に小さくなつて、うんともすんとも返事をしませんでした。

十次郎は、かつとなりました。

『おのれ、しぶとい奴。』

いひさま、股のあたりへ突つかけました。その時唯七も、若侍を突きふせて、飛びこんで来て、これも槍を突きつけて、おどしつけました。

その男は、どうかして逃げださうと、見ぐるしくうろろしました。

ちやうどそこへ、忠左衛門が、手燭をもつて來ました。その明りで見ると、白無垢の下着を着て人品のよい六十あまりの老人でした。

『白無垢を着てゐるところを見ると、身分のある方だ。たぶん上野介殿でせう。お二人とも、そこつなことをなさるな。』

忠左衛門は手燭をかかげて、よくよく見て、さういひました。そしてそのことを内藏助に知らせました。

この老人こそ、上野介といふことが、頭の古い痕なぞで、はつきりとなりました。内藏助は、相州物の名刀を、すらりと抜いて、

『亡君、内匠頭様の御名代をいたします。』

と、はつきりと呼ははりながら上野介の咽を刺しました。そして一番槍をつけた十次郎に、その首を斬らせました。



上野介の首と胴とははなれました。内藏助は、勝軍の古式にしたがつて、その首を三度采配ではらひました。主税をはじめ四十六人の人々はいづれも肅然としてうなだれ、だれの眼にもよろこびの涙がきらめきました。

唯七は上野介の白無垢の袖で、その首をつつんで、槍のさきに結びつけました。

有明の月は冴えて、雪はかたく凍つてゐました。内藏助は裏門に立つて、ぼんぼんぼんと銅羅をならして、引あげの合圖をしました。

勢ぞろひをして見ると、四十七人、一人として討死したものがありませんでした。

四十七士は、一たん回向院前に引あげましたが、回向院ではかたく門をしめて、入れてくれませんでした。そのころ、寺坂吉右衛門は、内藏助のいひつけで、列をはなれて麻布南部坂の瑤泉院と、それから安藝の廣島の大學頭のところへ使ひに行きました。

大高源吾と富森助右衛門とは、回向院前の酒屋へ立ちよつて、酒樽の鏡をぬいて立酒を飲みました。そして、

山を裂く力もぬけて松の雪

といふ句を詠みますと、助右衛門も、

寒鳥の身をむしらるる行方かな

といふ、一句をよみました。さうして源吾は、二兩の金を鼻紙袋のまま投げ出して行きました。



その時、内藏助は、ふと、氣がついて、

『蠟燭の火などを、消すのを忘れて來ました。たれか行つて見て來て下さい。』

と、いひました。赤埴源藏と矢田五郎左衛門とは、すぐに上野介の屋敷へ引き返して、すみからすみ——竈、火鉢のなかまでも見まはつて來ました。

四十七士は、大川の岸にそつて、南に下つて永代橋をわたりました。そのころ、日がほのぼのとあがつて、雪は美しくかがやき、空は日本晴れに、晴れわたりました。人々は晴ればれしい街なかを、列を正して進んで行きました。

靈岸島から鐵砲洲へぬけて、特にもとの内匠頭の邸の前を通りました。

めいめい涙でその邸にわかれをつげました。

汐止橋まで出ると、内藏助は、吉田忠左衛門と富森助右衛門とに、幕府の役人、大目附、仙石伯耆守の邸へ、討入りのことをとどけて出るやうにいひつけました。二人は列をはなれて、芝明舟町の伯耆守の邸へ出かけようとしみますと、そこへ寶井其角が、息を切つてかけつけて來ました。

『いや、お功でございました。ああ、どなたもどなたもお勇ましい。』  
さういつて、弟子の源吾たちをほめたてました。そして、

どれ見ても咲きおとりなし梅の花

といふ一句を贈りました。

忠左衛門と助右衛門とは、伯耆守の邸へ行きました。内藏助らは、高



輪の泉岳寺に引きあげて、上野介の首を内匠頭の墓前にそなへました。

その日の晩方、内藏助をはじめ一同、一つたん伯耆守の邸へ行つて、寛大なとりしらべを受けました。そして、内藏助、忠左衛門、十内ら十七人は細川越中守へ、主税、安兵衛ら十人は、松平隠岐守へ、八十右衛門、澤右衛門ら九人は、毛利甲斐守へ、間十次郎、間瀬孫九郎ら十人は水野監物へ、それぞれ、「天下の罪人」として、あづけられることになりました。しかし、また、「天下の義士」として、どこの邸でも、ていねいに待遇されました。そして、あくる年の二月四日、一同あづけられた邸で、切腹させられました。死骸は泉岳寺に葬られました。

寺坂吉右衛門は、それからまもなく江戸へ歸つて來ましたが、これは「おかまひなし」として、幕府からも、何の沙汰もありませんでした。

そして、永く生残つてゐました。

この吉右衛門を加へて、「四十七義士」として、いつまでもいつまでも語りつたへられました。



(出文協承認)  
7470662號



昭和十八年三月廿五日印刷  
昭和十八年三月三十日發行  
(六、〇〇〇部)

(版權所有)

(赤穂義士)

定價一圓五十錢  
送料十五錢

著者 三島霜川

發行者 齊藤嘉久  
東京市淺草區小島町一ノ二七

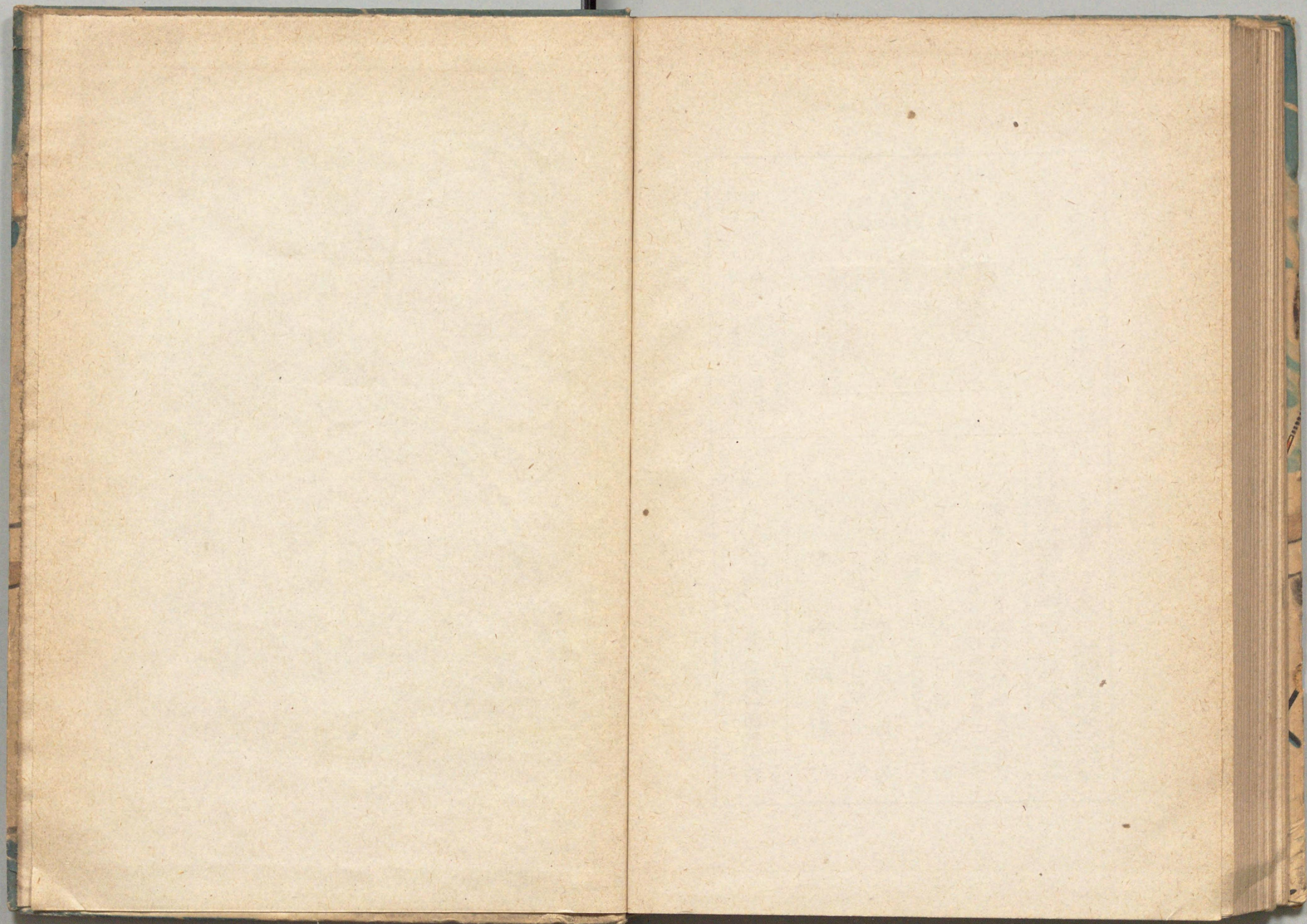
印刷者 內田柳次郎  
東京市小石川區大塚坂下町一三六

配給元 日本出版配給株式會社  
東京市神田區淡路町二ノ九

發行所 東京市淺草區小島町一ノ三  
兒童の友社

(會員番號一二〇五番)  
電話淺草(四)五二六九番  
振替東京七七九七三番

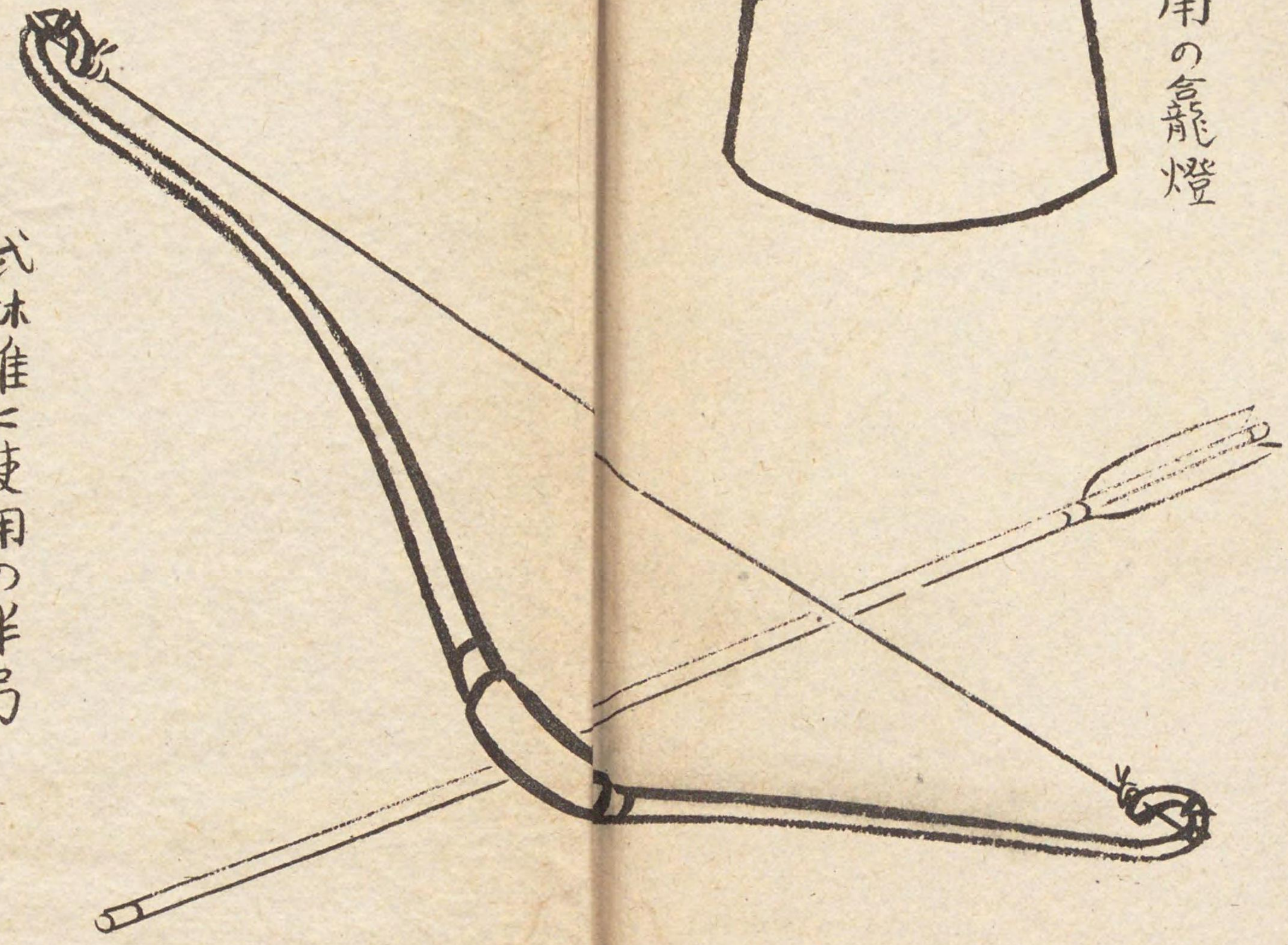




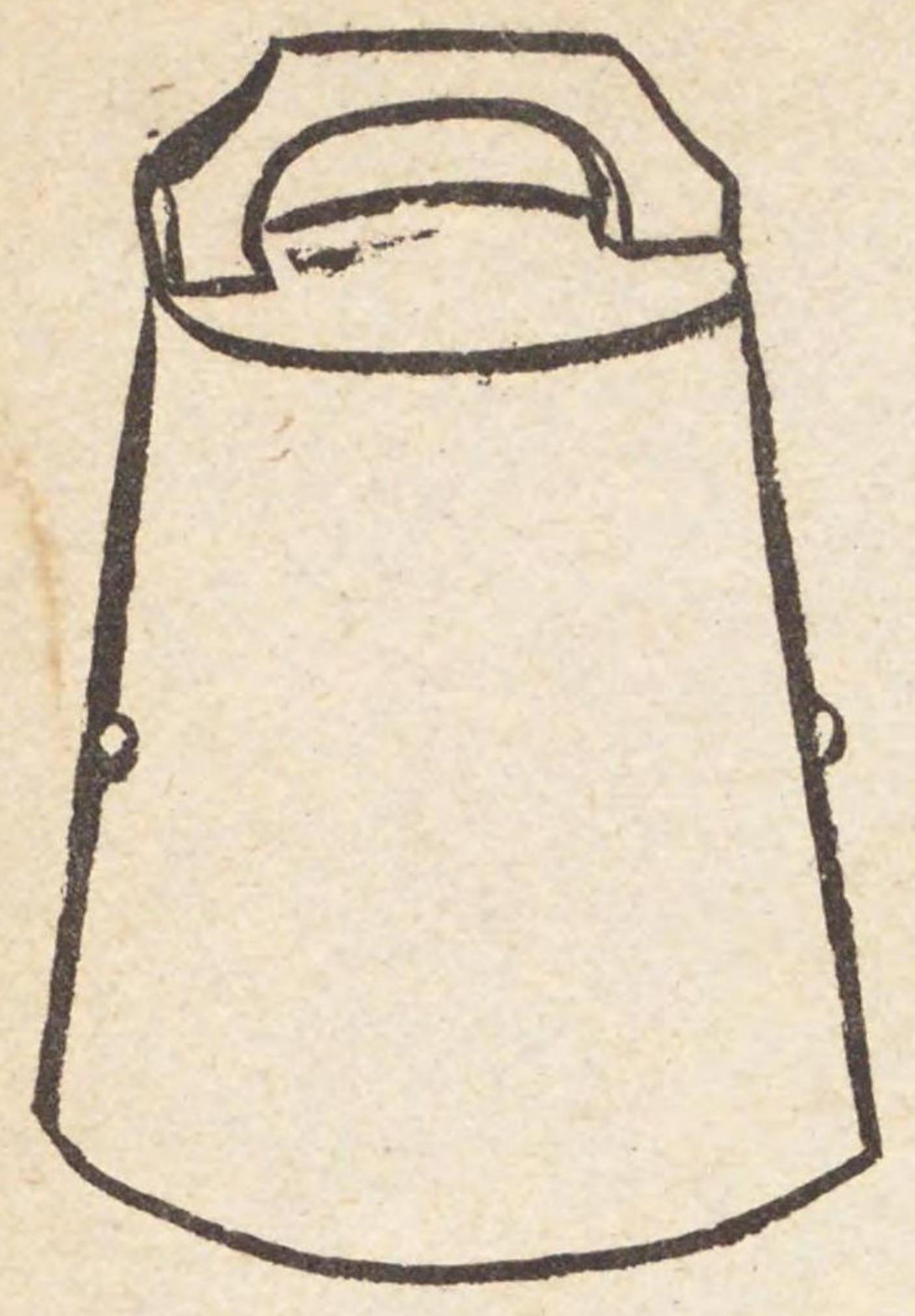


435  
65

武林唯七使用の半弓



435  
65



堀部彌兵衛使用の籠燈



